

手書きのノートテイクと パソコンノートテイク

文字による適切な配慮

ノートテイク(notetaking)は、教育現場において、障害をもつ学生に教員の声などの音声情報を伝える「適切な配慮(reasonable accommodation)」の1つです。大きく分けるとノートテイクには、手書き、そしてパソコンの活用という2つの方法があります。そのほかにも音声認識ソフトウェアを活用したシステムが試みられていますが、多くの解決すべき課題があり、また手軽に活用できるとはいえないことからここでは触れません。

ノートテイクの目的は、情報コミュニケーション支援を通じて、障害をもつもたないにかかわらず、すべての学生に学習環境を保障することにあります。教室内に情報弱者を作らないための情報バリアフリー支援策の1つともいえます。

ノートテイクは自らノートをとることが難しい上肢障害の学生や、板書が見づらい弱視の学生などにも有効ですが、聴覚に障害をもつ学生にとっては、教員が発する音声情報の伝達にとどまらず、授業の場に参加しているという意識を共有するためにも欠かせない方法です。たとえば、教員の発言にすべての学生が静まりかえる、質疑応答を通じて理解を深めていく、教員やクラスメートの冗談によってクラスが笑いに包まれるなど、その場のいきいきとした雰囲気のなかで学生は学びます。単に座っているだけでは授業に参加したとはいえないません。

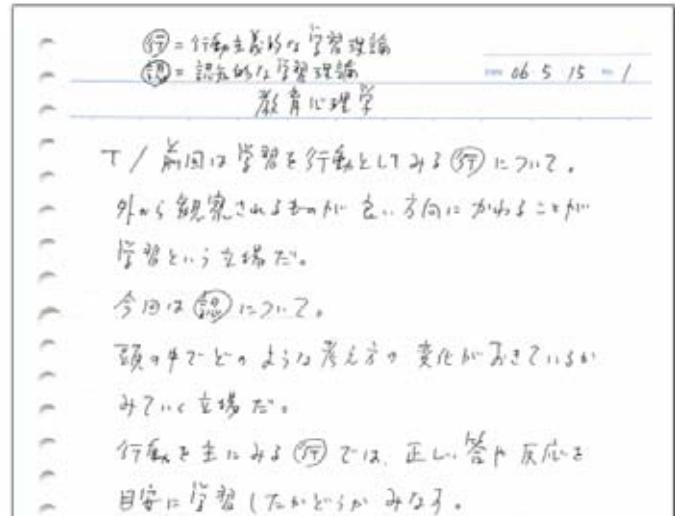
そこで、ノートテイカーはクラスの状況を文字情報によって補完的に伝えるという役割を担います。単に授業で教える内容のみを筆記あるいは入力すればよいわけではありません。要点を記した記録を渡すのであれば、友人のノートをコピーすれば十分でしょう。音声を手書きあるいはパソコンを活用して伝える場合、どうしてもタイムラグが生じるだけに、その場に参加しているという確かな気持ちにつながるような、言い換えれば参加意識を共有できるような支援技術が欠かせません。同じような社会福祉サービスに要約筆記^(注)がありますが、高等教育機関におけるノートテイク活動は、きわめて専門性が高い、学生にとっては授業の記録ともなる、テイカーが教育機関の設けたルールにしたがって活動するという点を特徴とします。

このようにノートテイクの目的や対象、方法などを明確に意識した上で、障害をもつ学生の支援活動の一環として、教育機関自らがその導入に取り組む必要があります。書き方や実技指導を内容とする養成講座の実施はもちろん、ノートテイクの運営に至るまで教育機関が責任を負います。講座の受講者は地域住民、在学生などを対象とします。講

座修了後、登録したノートテイカーは学内のルールに基づいて活動します。

手書きノートテイクの方法

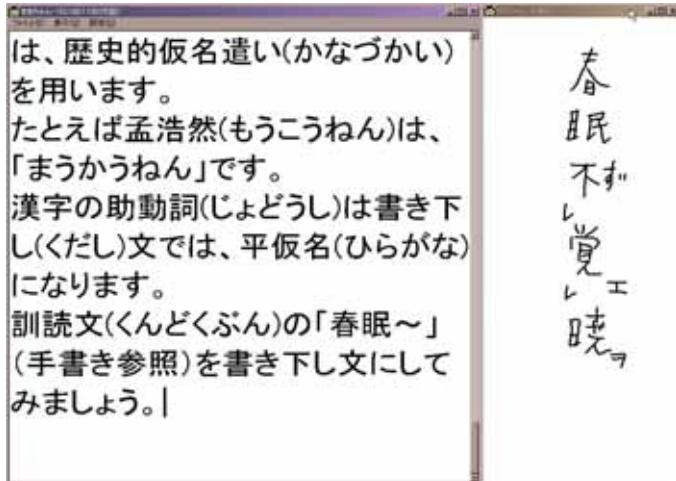
手書きによるノートテイクは、ノートテイカーがルーズリーフ用のノートなどに、水性ペンやボールペンで文字を素早く筆記する方法です。教員の発言を聞きながら、その要点を早く、正しく、読みやすく書くことがポイントです。



通常、ノートテイカーは2人1組となって、聴覚に障害をもつ学生の両隣に座り、ノート数枚ごとに、あるいは10分程度で交代しながら筆記します。学生は、筆先を目で追いますので、見やすい位置にノートを置くように留意します。上図の筆記例のように事前に略号を決めることもあります。手書きでは情報量が話すことばの10分の1程度となりますので、その授業の内容に対する理解的確に要約する力が要求されます。しかし、能力の高いノートテイカーが筆記したノートは、非常に整理され、重要部分がきっちりと書かれていますので、聴覚に障害をもつ学生への支援方法としては大変有効です。

一方、パソコンノートテイク(computer-assisted notetaking)は、筆記する代わりにキーボードを使って入力します。情報量としては手書きの2~3倍を伝えることが可能です。多くの情報を素早く得たいという学生の要望に応える方法であり、専門用語が頻出する大学の授業では、かな漢字変換ソフトの単語登録機能や専門辞書の活用といった工夫によって大きな威力を発揮します。パソコンノートテイクには、1人の入力者が教員の話を要約しながら入力し、LAN(ローカルエリアネットワーク)接続した利用学生のパソコン画面に情報を表示させる「1人要約入力」と、2人の入力者が話すことばを聞きながら、数文節ごと

に連係入力し、同様に LAN を通じて情報を伝える「連係入力」の 2 つの方法があります。さまざまな専用ソフトが開発されていますが、文字列を入力し、確定すると同時に素早く送信する機能、手書き文字や図形を送信する機能、そしてルビを簡単に振るといった機能に特化したソフト「まあちゃん」(下図は表示画面の例)は次のサイトから入手できます。(<http://www006.upp.so-net.ne.jp/haruyasu/>)



手書きノートテイクとパソコンノートテイクを比較すると、前者は少ない文字数によって最大の効果をもたらすための工夫が欠かせず、後者は文字数が多くなるゆえに整文作業を中心とする編集的な工夫が欠かせません。ところで、音声を通じた理解は必ずしも文字を通じた理解と一致しません。音声では強調や抑揚、間を活用しますが、それらを文字化することは不可能だからです。したがって、ノートテイカーは話しことばと書きことばのメディアとしてのちがいを意識することが求められます。話しことばをそのまま文字化したからといって、話しことばに含まれる情報が正しく伝わるとは限りません。

	情報量と特徴	求められる能力	養成上の課題
手書	原文の 2 割程度。箇条書き、体言止め、略語等を活用する。	読みやすい筆記。要点と構造を理解し、構文を作成する力。	授業を理解する専門性が必要。
PC	1 人要約入力では原文の 5 ~ 7 割。連携入力は 8 割程度。	PC を筆記用具として活用する力。整文する力。	PC 操作の習熟が必要なので受講生が集まりにくい。

一例ですが、たとえば音声で「オアオッス」と言ったとしましょう。聞き手は、その場の状況によって「おはようございます」を縮めて言ったのだと理解するでしょう。あるいは、東京の下町言葉「ンナコタネエ」という音声を「そんなことはない」と理解します。音声認識ソフトが音声を完璧に文字化できない理由もこの点にあります。

発行 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan) <http://www.pepnet-j.com>
 〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-3-15
 筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター
 支援交流室 聴覚系 WG 内 担当:白澤麻弓

PEPNet-Japan は、日本財団の助成による PEN-International(本部:ロチェスター工科大学 NTID 内)の事業の一部です。本シートは、アメリカ北東地域テクニカルアシスタンツセンター(NETAC)の作成による TipSheet を基に、PEPNet-Japan が日本版 TipSheet 作成事業(代表:松崎丈)の一環として作成したものです。本シートの内容の無断複写・転載を禁じます。

逆に、文字で書かれた「ばか」についても、「軽蔑するような調子」や「かわいらしい」という気持ち」あるいは「軽い気持ち」をこめて、幾通りにも表現することができますが、その表現は「ばか」という文字からは伝わりません。要は、話しことばを書きことばにするときは、音を文字にするのではなく、意味を文字にしているということ、一つ一つの音声は一つ一つの文字に対応するとはかぎらないということがいえます。そうした点に注意を払った上で、手書きとパソコンという 2 つの方法を活用することが求められます。

ノートテイクの評価

ノートテイカーを用意するだけでは、障害をもつ学生の学習を保障したことにはなりません。実際に書かれた、あるいは入力された内容を評価する仕組みが必要です。ノートテイカーのノートを評価し、現任研修を通じてその技術を高めていくことによって、ノートテイクの課題も明らかになります。そのノートに書かれた、あるいはパソコンが伝えた内容に基づいて、その学生は受験し、単位を取得するのです。ノートテイカーの誤記や情報のもれが新たな差別をもたらすことのないよう、教員の協力が欠かせません。教員側の直接的な配慮とノートテイカーによる間接的な配慮が相まって、はじめて適切な配慮は実現します。

直接的な配慮のなかには、ビデオなどの補助教材を使用する場合は字幕が付与されているかどうか確認する、ノートやパソコン画面を見ながら講義に参加する学生のために指示代名詞を使わず、具体的な名詞を使うなどが含まれますが、何よりも大切なことは障害をもつ学生を障害ゆえに特別扱いしないという点です。ノートテイクを含む学生への支援は、決してその学生の成績を保障するものではありません。そうではなく、障害をもつもたないにかかわらず、授業に参加する権利をもつ全ての学生に、その機会を平等に提供する仕組みなのです。

注:本文中でも触れたが教育機関におけるノートテイク活動は、社会福祉サービスの「要約筆記」活動と同一ではない。身体障害者福祉法施行規則に明記される法定事業としての要約筆記は所定のカリキュラムの修了者を登録条件とし、障害者の地域生活支援事業を推進する扱い手として位置づけられている。したがって教育機関独自で、文字による情報保障者を養成する場合は、「要約筆記」の名称ではなく「ノートテイク」がふさわしいと思われる。

執筆者 太田 晴康(おおた はるやす)

静岡福祉大学社会福祉学部福祉情報学科助教授

(2006年5月14日初版)

